

# 梵語 “hīnayāna” の蔵訳語について

— “theḡ pa dman pa” と “theḡ pa chung ngu” —

小林 守

## はじめに

前伝期のチベットにおいて、インドの梵語仏典をチベット語に翻訳するときの訳語の統一をはかるために「梵語—蔵訳語」の対応を定めた『翻訳名義大集 (*Mahāvīyutpatti/Bye brag tu rtogs par byed pa*)』が編纂された。チベットにおいて同書の規範性は強く<sup>1</sup>、そこに定められた梵蔵語の対応は、後伝期における仏典翻訳にも基本的に踏襲されていったが、しかし一部にその梵蔵語の対応に必ずしも従わないケースもみられる。例えば一般に漢訳仏典において“大乘”に対比されるべき漢語は“小乗”で、それらに相当する梵語は“mahāyāna”と“hīnayāna”であるが、後者の“hīnayāna”の蔵訳語は『翻訳名義大集』(Sakaki No.1253(4))に“theḡ pa dman pa (劣った乗)”と定められているにもかかわらず、蔵訳仏典には漢語の“小乗”にそのまま相当するかのとき“theḡ pa chung ngu (小さな乗)”という訳語も見出せるからである。

筆者は最近公表した拙稿において、前伝期の蔵訳としてのみ現存する『法性不動経 (\**Dharmatācalasūtra*)』なる経典が『デンカルマ目録』(芳村 No.267)に「漢文から蔵訳された大乘経典 (theḡ pa chen po'i mdo sde rGya las bsgyur ba)」に分類されているという、同経の漢文蔵訳の伝承の真偽の問題を扱った<sup>2</sup>。従来学会ではその『デ

<sup>1</sup> 『二巻本訳語積 (*sGra sbyor bam po gnyis pa*)』前文に、「『翻訳名義大集』に定められた訳語以外の形に仏典を翻訳することを禁じる」とする勅命が記録されているのは、よく知られている。Cf. Ishikawa [1990: 1, 25-26]: nam du yang gzhung lugs de las mi bsgyur zhing kun gyis bslab tu rung bar gyis shig ces bka' stsal nas/; 山口訳 [1985: 4]; 石川訳 [1993: 4]. ほかに、最新の研究として、西沢 [2017: 133-135] 参照。

<sup>2</sup> 小林 [2018: 44-50]. 『法性不動経』という経名は、チベットのガムポバ (sGam po pa bSod nams rin chen, 1079-1153) の用いる略称 “Chos nyid mi g.yo ba'i mdo” による。同経の具名は、『東北目録』『大谷目録』に、蔵訳タイトルが “'Phags pa Chos nyid rang gi ngo bo stong pa nyid las mi g.yo bar tha dad par thams cad la snang ba'i mdo” とあり、それを還梵した梵語名は “*Ārya-Dharmatāsvabhāvaśūnyatācalapratīsarvāloka-sūtra*” とあるが、これらを本来の経名とみるには問題がある。経名をめぐる問題は、小林 [2018: 38-44] で論じた。

ンカルマ目録』の伝承に否定的で、現存の『法性不動経』蔵訳本はインドの梵語原典からの蔵訳とみられてもいたが、拙稿では、同経にみられる蔵訳語“*theg pa chung ngu*”“*theg pa che chung*”を、順次に漢語“小乗”“大小乗”を翻訳したものとみなし、その蔵訳語の存在をもって同経の現存蔵訳本の「漢文蔵訳」の一根拠とした<sup>3</sup>。その際に、拙稿では、アティシャ (Atiśa/Dīpaṃkaraśrījñāna) 作『中観優波提舍開宝篋 (Ratnakaraṇḍodghāta-nāma-madhyamakopadeśa/ RKU)』『菩提道灯難語积 (Bodhi-mārgadīpapañjikā/BMP)』の蔵訳本にある“*theg pa chung ngu/chung ba*”という用例を示しながらもそれを特殊な例とみなして、そのアティシャの著作蔵訳本における用例は、『法性不動経』蔵訳本における“*theg pa chung ngu*”という訳語の存在がその蔵訳本の「漢文重訳」の根拠となり得ることを妨げるものではない、とした。

ただし、拙稿ではアティシャの上の2著作の蔵訳本における用例を示しただけで、なお用例不足そして論証不足の憾みがあるのは否定できない。よって、ここで、他の蔵訳諸本にみられる訳語“*theg pa chung ngu/chung ba*”“*theg pa che chung*”の用例を示してその特徴を指摘し、拙稿の不足を補うことにしたい。

## 1 前伝期の翻訳

はじめに、前伝期にチベット語に翻訳された資料のうち梵語原典の得られる経・論を取り上げることとする。筆者はそうした資料を網羅的に調査したわけではなく、以下の論述もその点で暫定的なものとならざるをえない。それでも、まず現在のところ前伝期に梵語から翻訳された蔵訳本において“*hīnayāna*”の訳語は“*theg pa dman pa*”が得られるだけで、“*theg pa chung ngu*”と翻訳された例は見出せない。

### 1.1 経典の翻訳

まず経典では、例えば『迦葉品 (Kāśyapaparivarta/KP)』(蔵訳者: Jinamitra/Śīlendra-bodhi/Ye shes sde) に梵蔵“*hīnayāna/theg pa dman pa*”は3例 (§11,25,27) みられるが、1例のみをあげておく。

KP (§11. Skt p.25) : udārādhimuktikeṣu satveṣu hīnayāna-saṃprakāśanā bodhisatvasya skhalitaṃ// ; (Tib p.26) : rgya chen po la mos pa'i sems can rnam la theg pa dman pa ston pa byang chub sems dpa'i 'khrul pa dang/ ; (JT p.19) : 広大(な教え)を願っている(大乘の)衆生に小乗を説くことは、菩薩のあやまちである。

<sup>3</sup> 拙稿では、ほかに『法性不動経』蔵訳本にある“*mdo sde bcu gnyis*”を漢語“十二部経”を蔵訳したものとみて、それも同経蔵訳本の「漢文蔵訳」の一根拠とした。Cf.後注 30.

上と同じ梵蔵は、前伝期に翻訳された『法華経 (Saddharmapuṇḍarīka/SP)』(蔵訳者: Surendrabodhi/Ye shes sde)<sup>4</sup>、『維摩経 (Vimalakīrtinirdeśa/VN)』(蔵訳者: Chos nyid tshul khriṃs (Dharmatāśīla))<sup>5</sup>にも認められる。

ほかに、『八千頌般若経 (Aṣṭasāhasrikāprajñāpāramitā/ASP)』の蔵経本は、前伝期に Śākyasena/Jñānasiddhi/Dharmatāśīla によって翻訳され、後伝期にその蔵訳がリンチェンサンポやゴク大翻訳師等によって何度も校訂されたものであるが、その『八千頌』蔵経本に“*theg pa dman pa*”とあるのは前伝期の翻訳をそのまま伝えるものとみておく<sup>6</sup>。

## 1.2 論書の翻訳

次に、前伝期に翻訳された論書では、例えば『中辺分別論 (Madhyāntavibhāga/MAVi)』『同世親釈 (-bhāṣya/MAViBh)』(蔵訳者: Jinamitra/Śīlendrabodhi/Ye shes sde)に、こうある。

MAViBh(Skt p.65,1-9) : *hīna-cittaṃ ca vikṣepaḥ parijñeyo hi dhīmatā*//(V 12cd)……  
*hīna-cittatvam/ manasikāra-vikṣepaḥ/ hīnayāna-manasikāra-samudācarāt/* ; (Tib pp.104,5-105,1) : *chung ngu'i sems ni g.yeng ba ste// blo ldan rnams kyis shes par byal*// (V 12cd)……  
*dman pa'i sems ni yid la byed pa'i rnam par g.yeng ba ste/ theg pa dman pa yid la byed pa kun tu 'byung ba'i phyir rol*// ; (JT pp.330-331) : 低級なものを(欲している)心とが散乱であると、知恵あるものは知るべきである。(V 12cd)……低級なものを(欲している)心は、思索による散乱である。(低級な乗、すなわち)小乗にもとづく思索が行なわれ(大乘の思索から散乱する)るからである。

上のうち、下線部“*hīnayāna/theg pa dman pa*”のような専門用語ではないが、本頌破線部の“*hīna-cittaṃ*”が“*chung ngu'i sems*”、世親釈波線部の“*hīna-cittatvam*”が

<sup>4</sup> SP (Skt p.46,14) : na *hīnayānena* nayanti buddhāḥ// ; (Tib D20a7, P23a4-5) : sangs rgyas *theg pa dman pas* mi 'dren to// ; (JT Ip.60) : 「仏陀たちは、劣った乗り物(小乗)によって(人々を)導くことはない」。Cf.Ejima[1998].

<sup>5</sup> VN (Skt p.16,11-12) : sarvadharmasravaṇasāṃkathyeṣu ca saṃdṛśyate *hīnayāna*-vicchandanāya mahāyāne samādāpanatayā// ; (Stk/Tib p.60) : *theg pa dman pa* la mos pa zlog cing theg pa chen po la sems can rnams yang dag par gzud pa'i phyir chos nyan pa dang/ yang dag par brjod pa thams cad na yang snang ba/ ; (JT p.31) : 「あらゆる聞法や講演会に現れるのは、小乗を厭離させ、大乘に勧誘するためである」。なお、VNの蔵訳者 Chos nyid tshul khriṃs (Dharmatāśīla)は『翻訳名義大集』編集者の一人とされる。Cf.羽田野[1986b:312] ; 石川[1993:4] ; 原田[2005].

<sup>6</sup> ASP (Skt W509,9, M238,21) : *hīnayānam* paryeṣitavyaṃ maṃsyante/ ; (Tib D131b7, P141b7) : *theg pa dman pa* yongs su btsal bar sems na/ ; (JT Ip.293) : 「小乗を求めるべきだ、と考えるであろう(菩薩たちは)」。Cf.Conze[1973]. 『八千頌』の蔵訳をめぐる問題は、庄司[2016]参照。

“dman pa'i sems”という具合に、梵語“hīna”が“chung ngu”と“dman pa”に訳し分けられているのが注目される。同じ文脈にある“hīna”が“chung ngu”“dman pa”の二様に翻訳される例は、ほかに『俱舎論注』蔵訳本にもみられる<sup>7</sup>。それはチベット語の“chung ngu”と“dman pa”に意味の重なりがあるからにはほかならない。梵語“hīna”がこのように“dman pa”と意味の重なる“chung ngu”とも翻訳されるのであれば、“hīnayāna”に対する訳語“theg pa chung ngu”も、『翻訳名義大集』の翻訳規準からは逸脱しているが、自然に生まれた訳語ともいえる。すでに前伝期の『デンカルマ目録』にも“theg pa chung ngu'i mdo sde (小乗經典)”という項目が設けられているのは、よく知られている。

ほかに、論書の翻訳では、『大乘莊嚴經論世親釈 (Mahāyānasūtrālamkārahāṣya/MSABh)』(蔵訳者: Śākyasiṃha/dPal brtsegs)に、こうある<sup>8</sup>。

MSABh (ad XX42. Skt p.183,25-26) : abhijñācaryā dvayor api mahāyāna-hīnayānādhimuktayoḥ prabhāveṇāvarjanārtham/ ; (Tib D256a6, P283a2-3) : mngon par shes pa'i spyod pa ni// theg pa chen po dang dman pa la mos pa gnyi ga mthus 'dun par (phar D) bya ba'i phyir ro// ; (JT 4.134) : 神通の行は、大乘を信解すると小乗を信解するとの両者に対してであって、その威力を以て彼等を誘引するためである。

上の梵語蔵訳では“mahāyāna-hīnayānā-”という梵語複合語に2つある“yāna”の1つを省略して“theg pa chen po dang dman pa”と翻訳されているのが興味深い。この点は後述する。

以上、扱った資料は多くはないが、前伝期の梵語蔵訳資料に“theg pa chung ngu”の訳語は現在のところ見出すことはできない。

## 2 後伝期の翻訳

次に、後伝期の翻訳をみてみよう。膨大な後伝期の資料のうちここで検討するのは、アティシャの著作の蔵訳のほかに、主に西藏大蔵経タントラ部収録の『三理趣燈 (Nayatrāyapradīpa)』以下、多かれ少なかれ顕密の教判的次第に関わる一連の作品 (Toh Nos.3707-3720, Ota Nos.4530-4543) にかぎることとする。それらの作品の梵語原典は得られない。

まず前伝期の『翻訳名義大集』に定められた“hīnayāna”に対する蔵訳語“theg pa dman pa”が、前伝期の翻訳のみならず、後伝期の翻訳にも用いられるのは言うま

<sup>7</sup> 小林[2018:80,n.29]. なお『俱舎論』索引 (Hirakawa[1973])、『莊嚴經論』索引 (Nagao[1958])、『中辺分別論』索引 (MAViBh(Skt) Nagao ed.) によると、“hīna”の蔵訳語は“dman pa/chung ngu”のほかに“grib pa/ngan pa/nyams pa/phri (nas)/bri (ba)”があげられている。

<sup>8</sup> Cf.Nagao[1958].

でもない。それは、後伝期の代表的な翻訳者であるリンチェンサンポ (Rin chen bzang po, 958-1055)<sup>9</sup>、パツァブ・ニマタク (Pa tshab Nyi ma grags, 1055-?)<sup>10</sup>、ゴク大翻訳師 (rNgog lo tsā ba chen po Blo ldan shes rab, 1059-1109)<sup>11</sup>による蔵訳本に見出される。しかし後伝期の蔵訳本の幾つかにはそのほかに“theg pa chung ngu”の訳語がみられる。

## 2.1 訳語 “theg pa chung ngu”

後伝期のナクツォ翻訳師ツルティムギェルワ (Nag tsho lo tsā ba Tshul khriims rgyal ba, 1011-?) は、アティシャの側近の弟子として彼の多くの著作を彼とともに翻訳した人物である<sup>12</sup>。リンチェンサンポ等と同じようにナクツォも又“theg pa dman pa”の訳語を用いるのは自然なことだが<sup>13</sup>、彼がそのほかに“theg pa chung ngu”の訳語を用いるのが注目される。

ナクツォ翻訳師が関わったアティシャの作品の蔵訳のうち、まずインドでチベット語に翻訳された可能性のある『中観優波提舍開宝篋 (RKU)』(蔵訳者：Dīpaṃkaraśrījñāna/rGya brTson 'grus seng ge/Tshul khriims rgyal ba) に<sup>14</sup>、こうある。

RKU (Tib M29,11-12) : theg pa dman pa'i gang zag bsten pa dang/ theg pa chung ngu'i gzhung la brtson pa dang/ ; (JT 宮崎訳[2007:89]) : 劣乗の人を頼ること、小乗の教説を求めること。

上の2つの下線部の梵語をあげるなら双方とも“hīnayāna”のほかには考えられないだろう。“theg pa dman pa”という同じ訳語を繰り返すのを避けるために、2度目の“hīnayāna-”は“theg pa chung ngu”と翻訳したのか。

次に、西チベット・ガーリーで翻訳されたアティシャ作『菩提道灯難語積 (BMP)』(蔵訳者：Dīpaṃkaraśrījñāna/Tshul khriims rgyal ba) に、こうある。

BMP (Tib D261a1, P300b8) : bud med kyi nyes dmigs kyang theg pa chen po dang theg pa chung ba'i mdo dang lung rnams su blta bar bya ste/ ; (JT 望月訳[2015:86]) : 女

<sup>9</sup> Cf. Janārdana/Rin chen bzang po 訳『真性心髓集』TSS (Tib D84a7, P93a5) : nyan thos kyi theg pa ni theg pa dman pa'o zhes gsungs pa yin la/ ; (JT) : 「声聞乗とは小乗であると説かれる」。

<sup>10</sup> Cf. Nyi ma grags/mDo sde 'bar 訳『大経集』MSS (Tib M369,15-16, D194b5, P225a6) : yid la byed pa'i rnam par g.yeng ba ni theg pa dman pa la dga' ba'i phyir ro// ; (JT) : 「作意の散乱とは、小乗を喜ぶからである」。ほかに、MSS (Tib M367,12-13, D193b4, P223b7)。

<sup>11</sup> Cf. Go mi 'chi med/Blo ldan shes rab 訳『現観莊嚴論』AA V28c (Skt/Tib) : hīnayāna-manaskārau ; theg pa dman pa yid byed dang//

<sup>12</sup> ナクツォ翻訳師については、川越[2001][2001a]参照。

<sup>13</sup> Cf. Jñānākara/Tshul khriims rgyal ba 訳『秘密真言入』MA (Tib D195a2, P220b3-4) : theg pa dman pas mya ngan 'da'// des na 'bras bu dman zhes bya// ; (JT) : 「小乗によって涅槃に入る。それゆえ“劣った果”といわれる」。『秘密真言入』の蔵訳は、著者である Jñānākara 自身とナクツォ・ツルティムギェルワの共訳。両者の関係については、川越[2001a:282-285]参照。

<sup>14</sup> 『開宝篋 (RKU)』がインドで翻訳された点は、川越[2001:305]に論じられている。

性の過失も大乘と小乗の経典や聖典を見るべきである。

後伝期の翻訳文献には“*theg pa chung ngu*”がより多く見られるが、“*theg pa chung ba*”の形も認められる (cf.後述 (2.2) のTMD②)。無論意味は同じである。上の『開宝篋』と『菩提道灯難語釈』の用例は、別稿で指摘した<sup>15</sup>。

ナクツォ・ツルティムギェルワによる蔵訳では、ほかに、アティシャの著作そのものではないが彼の『中観優波提舍』(Toh No.3929, Ota No.5326) へのPrajñāmokṣa (Shes rab thar pa) による注釈『中観優波提舍注 (*Madhyamakopadeśa-vṛtti*/MUV)』(蔵訳者: Shes rab thar pa/Tshul khriṃs rgyal ba) に、こうある。

MUV (Tib D118b1, P135b6) : shes rab dang snying rje la sogs pa chung ba ni theg pa chung ngu zhes bya ste/ ; (JT) : 知恵と慈悲等の小さなものは小乗と言われる。

上はナクツォ翻訳師による蔵訳3例である。

ナクツォ訳ではないが、同じくアティシャの著作の蔵訳本では、ほかに『帰依教説 (*Śaraṇagamanadeśanā*/ŚGD)』に、こうある。

ŚGD (Tib D<sup>1</sup>298a1-2, D<sup>2</sup>22b6-7, P<sup>1</sup>346b7, P<sup>2</sup>29a2, S430,14-16) : de la rten gyi gang zag ni gnyis te/ theg pa chen po'i rigs can dang/ theg pa chung ngu'i rigs can no// gnas ni nram pa gnyis te/ theg pa che chung gi bye brag gis so// ; (JT) : そこで、所依なる人は、大乘の種姓をもつものと、小乗の種姓をもつものとの2つである。抛り所は、大小乗の区別によって、2種である<sup>16</sup>。

<sup>15</sup> 小林[2018:47].

<sup>16</sup> 『帰依教説』は冒頭の udāna (sdom) に列挙される15項目のもとに“帰依”が解説されるが、ここの“rten(所依)”と“gnas(抛り所)”はそのうちの第1と第2。後者の“gnas”を、望月[1990:5;12,n.11]は「処」と訳すがその意味は「帰依の対象」とする。Sherburne[2000:431]は“stage”と訳す。『帰依教説』の解説によると、大乘と小乗のテキストに説かれる、それに対して帰依するところの対象が“gnas”といわれている。今は「抛り所」と和訳した。ŚGDのその一節は分かりにくい部分を含んでいる。望月[1990]と Sherburne[2000]の翻訳を参照しつつ、以下に蔵訳と拙訳を示す。ŚGD (Tib D<sup>1</sup>298a1-7, D<sup>2</sup>22b6-23a4, P<sup>1</sup>346b7-347a5, P<sup>2</sup>29a2-b1, S430,14-432,17) : de la rten gyi gang zag ni gnyis te/ theg pa chen po'i rigs can dang/ theg pa chung ngu'i rigs can no// gnas ni nram pa gnyis te/ theg pa che chung gi bye brag gis so// de la theg pa chen po pa'i (po'i D<sup>1</sup>) gzhung gis ni dkon mchog gsum 'di lta bu yin te/ (/ om. D<sup>1</sup> P<sup>1</sup>) de kho na nyid kyi dkon mchog gsum dang/ mngon par rtogs pa'i dkon mchog gsum dang/ mdun du bzhugs pa'i dkon mchog gsum mo// de yang 'di ltar shes bya phyin ci ma log par mkhyen pa/ nram par mi rtog pa gnyis su med pa'i ye shes/ chos kyi dbyings la gnas pa dang/ chos kyi dbyings nram par dag pa shes rab kyi pha rol tu phyin pa de nyid dang/ mnyam par gzhas pa'i dus su chos thams cad nam mkha'i dkyil lta bur shes pa'i byang chub sems dpa' sa chen po la gnas pa dang/ yang 'di ltar gzugs kyi sku nram pa gnyis dang/ (/ om. D<sup>1</sup> P<sup>1</sup>) bden pa bzhi dang/ byang chub kyi phyogs kyi chos sum cu rtsa bdun dang/ sa dang/ (/ om. D<sup>1</sup> P<sup>1</sup>) pha rol tu phyin pa la sogs pa'i chos rgyud la gnas pa dang/ sbyor ba'i lam pa'i (gyi D<sup>1</sup>) byang chub sems dpa' dang/ yang 'di ltar ri mor bris pa dang/ 'bur du btod (gtod D<sup>2</sup> PP<sup>2</sup>) pa dang/ lugs ma dang/ lder so (⇒ lder bzo ?) la sogs pa dang/ gsung rab yan lag dgu'i bdag nyid po ti dang/ glegs bam la sogs pa dang/ tshogs kyi lam pa'i byang chub sems dpa'o// theg pa chung ngu'i gzhung ni/ gang zhig gsum la skyabs 'gro ba// sangs rgyas dge 'dun byed pa'i chos// mi slob pa dang gnyis ka dang// mya ngan 'das la skyabs su 'gro// zhes bya ba yin no// ; 和訳: 「そのうち所依なる人は、大乘の種姓をもつものと、小乗の種姓をもつものとの2つである。抛り所は、大小乗の区別によって、2種である。そのうち大乘のテキストによると、三宝とは、このようなものである。すなわち、真実の三宝と、現観の三宝と、現前の三宝と

『帰依教説』の蔵訳は、東北大学所蔵デルゲ版大蔵経では中観部所収 (Toh No.3953) とアティシャ小部集所収 (Toh No.4478) の2本が収録されている。『東北目録』ではそのうち中観部所収本を「Mar me mdzad ye shes/dGe ba'i blo gros 訳」とするが、実際には2つのデルゲ版蔵訳本の奥書に翻訳者名は記されていない<sup>17</sup>。しかしプトゥンの仏教史目録部 (西岡No.761) に『帰依教説』蔵訳は「dGe blo (つまりrMa dGe ba'i blo gros) 訳」とある<sup>18</sup>。『東北目録』の記載は蔵訳本奥書以外の何らかの資料に依ったのかもしれない。マ・ゲウェーロドゥは、西チベット・ガーリー地方で活躍した翻訳師で、彼はアティシャの『菩提道灯』を、彼といつしよに翻訳している<sup>19</sup>。ゲウェーロドゥが『帰依教説』の蔵訳者であるとする、その翻訳時期はナクツォ・ツルティムギェルワが『菩提道灯難語釈』を翻訳したのと同じ頃となる。よって“*theg pa chung ngu*”という訳語は、11世紀中頃に、ナクツォ等により、アティシャの著作の翻訳において用いられ始めた可能性があるだろう。

---

ある。それも、[真実の三宝は] こうである：[仏とは] 所知を無倒錯に認識なさる無分別なる無二智・法界に安住するお方、[法とは] 清浄法界・般若波羅蜜そのもの、[僧とは] 入定時に“一切法は虚空輪の如し”と認識する、大なる地 (見道等) に住する菩薩<sup>a)</sup>、である。又 [現観の三宝は] こうである：[仏とは] 2種の色身<sup>b)</sup>、[法とは] 四諦・三十七菩提分法・地・波羅蜜等の [仏の] 心相続に存在する法<sup>c)</sup>、[僧とは] 加行道にある菩薩、である。又 [現前の三宝は] こうである：[仏とは] 絵に描かれた [仏]、浮彫の [仏]<sup>d)</sup>、鑄造の [仏]、塑像の [仏] 等、[法とは] 九分教よりなる経巻と書物等、[僧とは] 資糧道にある菩薩、である。小乗のテキストは、「およそ三 [宝] に帰依する者は、仏と僧とを成ずる、無学法と両方の法 (つまり学・無学の法) と、涅槃に帰依する<sup>e)</sup>とある」。

a) テキスト “*byang chub sems dpa' sa chen po la gnas pa*” の下線部ははっきりしないが、真実の三宝につづく現観の三宝における僧は “*sbyor ba'i lam pa'i byang chub sems dpa'* (加行道にある菩薩)” そして現前の三宝における僧は “*tshogs kyi lam pa'i byang chub sems dpa'* (資糧道にある菩薩)” とあるので、“*sa chen po*” は「見道 (もしくは見道及びそれより上位の道)」を指すとみて、「大なる地 (つまり見道等) に住する菩薩」と理解しておく。望月 [1990:5] 「菩薩の大地に住する人」、Sherburne 訳 [2000:433] “at the stage of the great Bodhisattva Level” は、テキストを “*~ sems dpa'i sa chen po*” と読み込んでいるのか。

b) 『宝性論』に「化現と法の享受なる2種の色身 (*nirmāṇa-dharmasambhoga-rūpakāyadvaya*)」とある。Cf. 高崎訳 [1989:174]. それがここの「2種の色身 (*gzugs kyi sku rnam pa gnyis*)」か。

c) “*~ la sogs pa'i chos rgyud la gnas pa*” のうち下線部は、はっきりしないが、今は「~等の [仏の] 心相続に存在する法」と訳しておく。望月 [1990:5;12,n.11] は「~などの教えの相続を保持すること」と訳し、Sherburne [2000:433] は “religious development” と訳すようである。

d) “*bur du btod (gtod P) pa*” は「石を彫って仏の姿を凸起させ (*bur du*) 作り出した (*btod pa*)」という意味にとり、「浮彫の仏」と和訳しておく。望月 [1990:6] は「壁像」とする。

e) 所引の詩節は『俱舍論』IV 32. Cf. AKBh 216,15-23 : *yo buddham śaraṇam gacchati aśaikṣān asau buddhakarākān dharmān charaṇam gacchati …… yaḥ saṃghaṃ śaraṇam gacchati śaikṣāśaikṣān asau saṃghakarākān dharmān gacchati …… yo dharmam śaraṇam gacchati asau nirvāṇam śaraṇam gacchati pratisaṃkhyānirodham/ ; 舟橋 [1987:180-181].*

<sup>17</sup> 『大谷目録』では北京版中観部所収の2本 (Ota Nos.5350,5391) に翻訳者の記載はない。

<sup>18</sup> 西岡 [1982:No.761] に “*Jo bo rjes mdzad pa'i sKyabs 'gro bdun pa dGe blo'i 'gyur*” とあって、蔵訳書名が少し異なる。又プトゥンの『テンギェル目録』には、アティシャ作 *sKyabs su 'gro ba bstan pa* の翻訳者は記されていない。*bsTan dkar* (La)93b3(p.586), (La)95a4(p.589).

<sup>19</sup> Cf. 川越 [2001:302]. なお、ゲウェーロドゥについては、後注 28 参照。

上に示した『帰依教説』蔵訳において、より注目されるのは、破線部“*theg pa che chung*”であるが、この蔵訳語については後述することにしよう。

次に、アティシャ以外の論師の著作の蔵訳では、ヴァジュラパーニ (Vajrapāṇi) 作『上師相承次第優波提舍 (*Guruparamparakramopadeśa*/GPKU)] (蔵訳者：Dhīrīśrījñāna/’Broḡ Jo sras) に、こうある。

GPKU (Tib D166a3-4, P186b1) : Kha che Bye brag tu smra ba bstan pa de ste theg pa chung ngu mdor bstan pa’o// ; (JT) : カシュミール毘婆沙師の教えが、それ (上根の声聞と独覚の立場) である。すなわち [上に西方毘婆沙師とカシュミール毘婆沙師の教えを示したのは] 小乗を略説したものである。

ヴァジュラパーニは、言うまでもなくアティシャの同時代人であるアドヴァヤヴァジュラ (Advayavajra) の弟子で、師説をうけて著したGPKUにおいて、声聞を下根・中根・上根に三分しそれに独覚を加えた4種の人々の立場に関して、下根・中根の声聞は西方毘婆沙師 (Nub phyogs Bye brag tu smra ba/Pāścātyavaibhāṣika)、上根の声聞と独覚はカシュミール毘婆沙師 (Kha che Bye brag tu smra ba/Kāśmīravaibhāṣika) の立場をとるとし、それらを“小乗”とする<sup>20</sup>。その“小乗”の蔵訳語が“*theg pa chung ngu*”である。著者 (Vajrapāṇi) と2人の蔵訳者 (Dhīrīśrījñāna/’Broḡ Jo sras rDo rje ’bar) からみて、GPKUは11世紀中頃から後半にチベット語に翻訳されたものであろう<sup>21</sup>。

<sup>20</sup> Cf. 磯田[1979]. 『青史 (*Deb sngon*)』によると、ヴァジュラパーニは 1017 年の生まれ。 *Deb sngon* D(Da)2b6(p.746), C986,7-8 : Phyang na ’di ni me mo sbrul gyi lo (1017) la ’khrungs/ ; Roerich 訳 [1948:843].

<sup>21</sup> Cf. 小林[2008:195]. GPKU の蔵訳者2名のうちインド人 (rGya gar gyi mkhan po) Dhīrīśrījñāna の名は、GPKU 奥書にしたがって『東北目録』(Toh No.3716) に“Dhīro Śkrijñāna”、『大谷目録』(Ota No.4539) に“Rdīro Śkrijñāna’i zhabs”と記載されており、プトウンの『テングル目録』(*bsTan dkar* (La)83a2(p.565)) では“dhī-roṣṭi-jñāna (?)”とあって、一定していない。しかし Avadhūti-pa 作の *Dohanidhi-nāma-tattvopadeśa* と *Tattvamahāyānaviṣṭi* 及び Śāntideva 作 *Sahajagīti* の3作品の蔵訳者は、上の3目録 (Toh Nos.2247,2250,2341 ; Ota Nos.3092,3095,3169 ; *bsTan dkar* (La)48a2-4,50a5) に“Dhīrīśrījñāna”とあり、さらに『青史』にはヴァジュラパーニの弟子の一人として Dhīrīśrījñāna があげられているから、この人物がヴァジュラパーニの作品 GPKU の蔵訳者でもあるだろう。(尤も『青史』も近年の洋装本 *Deb sngon* C986,11 に“dhī-ri-śrījñāna”とあるが、ペチャ *Ibid.* D(Da)2b7(p.746) では“dhī-tri-śrījñāna (?)”、そして Roerich 訳 [1949:843] には“Dhīrīśrījñāna”とあって、名が一定していない。梵語名としては Roerich 訳にあるかたち“Dhīrīśrījñāna”が分かりやすいが、今は Toh No.2247 等の蔵訳奥書にしたがって“Dhīrīśrījñāna”を採ることにした。)

GPKU のもう一人の蔵訳者は、奥書にチベット人 (Bod kyi lo tsā ba) ’Broḡ mi Jo sras と記載されている (『大谷目録』と、プトウン『仏教史目録』西岡[1983:No.2801]及び『テングル目録』では“’Broḡ mi Jo sras”だが、『東北目録』では“’Broḡ Jo sras”)。“’Broḡ mi Jo sras”という人物は、『雪域歴代名人辞典』(*Gangs can ming mdzod*, p.1246) では13世紀中頃に生まれた翻訳師で、ヴァジュラパーニの『上師相承次第優波提舍』の蔵訳者と説明されている。しかし『青史』(*Deb sngon* D(Da)9a4-5(p.759), C1002,1-5 ; Roerich[1949:857]) には、’Broḡ Jo sras (rDo rje ’bar) なる人物がヴァジュラパーニをチベットに招請し、ヴァジュラパーニのチベットでの弟子の一人であったと記されているから、この人物こそ GPKU の蔵訳者としてふさわしいだろう。要するに、GPKU は、著者ヴァジュラパーニの2人の弟子 Dhīrīśrījñāna/’Broḡ Jo sras rDo rje ’bar によ



その著者も蔵訳者も、ナクツォ翻訳師ツルティムギェルワと時代は重なっており、GPKU蔵訳本における“*theg pa chung ngu*”の訳語は彼の影響を受けた可能性もあるだろう<sup>22</sup>。

## 2.2 訳語 “*theg pa che chung*”

前節(2.1)で述べたように、アティシャ作『帰依教説』蔵訳本に“*theg pa che chung*”という訳語が用いられている。それは蔵外文献に広くみられる術語だが<sup>23</sup>、梵語の蔵訳語としては珍しい形である。筆者が確認できたところでは、その訳語は、翻訳文献ではほかにジュニャーナヴァジュラ作『真性見道 (*Tattvamārgadarśana/TMD*)』(翻訳者: Jñānavajra/rNgog Buddhapa)に見出せる。TMD蔵訳本には“*theg pa chung ngu/chung ba*”の訳語もみられるが、それらをまとめてあげるならこうである。

- ① TMD (Tib D138a6, P153b8) : chos theg pa che chung ston la/
- ② (Tib D154a2, P172a3-4) : theg pa chung ba *kr* (*kri* P) yog tu 'dus la/
- ③ (Tib D154a4-5, P172a6-7) : theg pa chung ngu'i mdo drang don chen po dang mngon par 'gro bas mngon pa dang/
- ④ (Tib D160a1, P179a2) : drang don nges don du bsgrub pa la theg pa che chung gnyis/

“ジュニャーナヴァジュラ”という名の人物は複数存在したことが知られているが、TMDの著者ジュニャーナヴァジュラは、同書にシャーンティパ (Ratnākaraśānti) が言及されているので、インド仏教末期に活躍した人物である<sup>24</sup>。又TMDを著者で

---

て、11世紀中頃から後半に、チベット語に翻訳されたのだろう。

<sup>22</sup> 『青史』(*Deb sngon D*(Da)9a6-7(p.759), C1002,8-10 ; Roerich 訳[1949:857])によると、ナクツォ・ツルティムギェルワと rMa ban Chos 'bar はヴァジュラパーニの弟子にして翻訳師なるもの(slob ma lo tsā ba)である。アドヴァヤヴァジュラ作『四印契優波提舍 (*Caturmudropadeśa*)』(Toh No.2295, Ota No.3143)の蔵訳者はヴァジュラパーニとツルティムギェルワ(ナクツォ翻訳師)であり、前注21にあげた Śāntideva 作 *Sahajagīti* の蔵訳者は Dhiriśrījñāna/rMa ban Chos 'bar である。ヴァジュラパーニ/ナクツォ/Dhiriśrījñāna の3人が同時代人であるのは間違いない。なお、前注21にあげた Dhiriśrījñāna による *Dohanidhi-nāma-tattvopadeśa* の蔵訳(Toh No.2247, fol.137a5, Ota No.3092, fol.150a5)には“*theg pa dman pa*”の訳語が見られる。かれは訳語“*theg pa chung ngu*”に固執したわけでもないのだろう。又、磯田[1979:131-132]は、『四印契優波提舍』のアドヴァヤヴァジュラ作を疑問視し、それは、ヴァジュラパーニがまとめあげたものではないかと言われる。

<sup>23</sup> すでに前伝期の『二卷本訳語釈』『デンカルマ目録』にみられる。E.g. Ishikawa[1990:1,24-25] : *theg pa che chung las 'byung ba'i rgya gar gyi skad* ; 石川訳[1993:4] ; 芳村[1974:118,1] : *theg pa che chung gi mdo sde*.

<sup>24</sup> TMD D143a7, P160a1 : Śānti-pa rjes thob la sprul skur 'dod/ ; cf. 小林[2008:195-196]. 西蔵大蔵経にはジュニャーナヴァジュラ作『入楞伽経注・如来心莊嚴 (*Tathāgatahṛdayālamkāra*)』(Toh No.4019, Ota No.5520)が収録されているが、羽田野[1988:109-110]によると、同書には、「11世紀の中葉から後葉に向かう振幅内に」活躍したとされる Jñānaśrībhadrā 作『入楞伽経注』(Toh No.4018, Ota No.5519)の所説がしばしば援用されているという。そこで、拙稿では、この『如来心莊嚴』の著者ジュニャーナヴァジュラが TMD の著者でもあるなら、TMD は、ほぼ11世紀後

あるジュニャーナヴァジュラと共に蔵訳したチベット人翻訳者 rNgog Buddhapāla は、『雪域歴代名人辞典』によると11世紀末の生まれで、そうであるならTMD蔵訳は12世紀前半から半ばに翻訳されたものか<sup>25</sup>。それは、上述のアティシャの諸作品やヴァジュラパーニのGPKUの蔵訳よりも後にチベット語に翻訳されたものとなるが、上のごときTMD蔵訳本の“*theg pa chung ngu*” “*theg pa che chung*” 等の訳語は、それらの先行する蔵訳本の影響を受けた可能性もあるだろう。

そのうち蔵訳語 “*theg pa chung ngu*” の梵語は “*hīnayāna*” 以外に考えられないが、蔵訳語 “*theg pa che chung*” の梵語を求めるなら、前節 (1.2) で取り上げた『大乘莊嚴經論注 (MSABh)』にある “*mahāyāna-hīnayāna*” となろうか。その梵語複合語はMSABhの蔵訳では “*yāna*” を1つ省略して “*theg pa chen po dang dman pa*” と翻訳されていたが、それを参考にすると、TMD等の蔵訳では、まず梵語 “*mahāyāna-hīnayāna*” を “*theg pa chen po dang chung ngu*” と翻訳し、それを蔵外文献流に “*theg pa che chung*” に簡略化した可能性もある。

もっともそのように複雑な過程を想定する必要はないかもしれない。この点で、上のTMD④破線部に “*drang don nges don (\*neyārtha-nītārtha)*” とあるのは、示唆的である。梵語 (散文) からの翻訳文献であるなら、それは “*drang ba'i don (dang) nges pa'i don*” とあるのが一般的である。だが、TMD蔵訳では専ら “*drang don/nges don*” が用いられている。その訳語は蔵外文献的といえる<sup>26</sup>。ほかに、TMD蔵訳本にしばしばみられる “*rnam gcod yongs gcod (\*vyavaccheda-pariccheda)*” “*rten 'brel (\*pratītya-samutpāda)*” も、梵語 (散文) の翻訳であるなら “*rnam par gcod pa (dang) yongs su gcod pa*” “*rten cing 'brel par 'byung ba*” とあるべきところを、蔵外文献において慣用的に用いられる略語 (*bsdus tshig*) をもって梵語の翻訳語としたもののようにみえる。さらに、

TMD (Tib D163a4, P183a2) : *ye shes nyams su myong zhing 'dod yon spyad pas ye shes thob la/ longs skur gyur nas las kyi phyag rgya mthar phyin pa'o//*

---

半以降に活躍した人物の作となるとした。『如來心莊嚴』の作者は奥書に “*rGya'i mkhan po Jñānavajra*” とあるが、羽田野[1988:110]は、「このジュニャーナヴァジュラが中国出身であるという理解には問題があろう……この註釈書は中国からチベット訳されたものでもありえない」とする。『如來心莊嚴』とTMDの2書の著者の同異は今後の検討課題である。

<sup>25</sup> Cf. 小林[2008:196]. *Gangs can ming mdzod*, pp.469-470 は、rNgog Buddhapāla は11世紀末に生まれ、はじめチベットで学習し、その後カシミール、ネパール、インド等においてインドのテキストと梵語を学んだ翻訳師とする。拙稿ではTMDの蔵訳された時期を「12世紀前半」としたが、もう少し幅をもたせて「12世紀前半から半ば」としておく。なお、西岡[1983:No.2813]はこの翻訳者の名を “*rDog Bu.*” と記す (*slob dpon Ye shes rdo rjes mdzad pa'i De nyid mthong ba'i lam rDog Buddha pā la'i 'gyur/*)。チベット文字 “*rngog*” と “*rdog*” は字形が似ているが、今はTMD蔵訳奥書にしたがって “*rNgog Bu.*” とする。

<sup>26</sup> 上のTMD②にある “*kri yog*” も、梵語 “*kriyā-yoga*” の蔵外文献流の音写略語。Cf. 『藏漢大辞典』 *kri yo ga* : (*legs*) *kri ya dang yo ga ste/ bya rgyud dang/ rnal 'byor rgyud gnyis kyi bsdus ming/*

とあるうち、下線部 “’dod yon” と “longs sku” は、順次に、『翻訳名義大集』にある “’dod pa’i yon tan (\*kāmagaṇa)” “longs spyod rdzogs pa’i sku (\*sambhogakāya)” という標準形の蔵外文献流の略語であろう。

これらの用例をみるなら、TMD蔵訳本には、梵語（散文）テキストからの翻訳文献にみられる標準的な蔵訳語の蔵外文献流の略語が多用されているといえる。よって、TMD蔵訳本そして前述のアティシャ作『帰依教説』蔵訳本にみられる “*theg pa che chung*” という訳語も、単に梵語 “*mahāyāna-hīnayāna*” を蔵外文献流の慣用的な略語をもって翻訳したにすぎない可能性があるだろう。

### 3 『大般涅槃経』漢文蔵訳における “*theg pa chung ngu*”

上にみてきたことから、梵語 “*hīnayāna*” の蔵訳語は、前伝期では専ら “*theg pa dman pa*” だが、後伝期ではそのほかに “*theg pa chung ngu*” も用いられたと、一応の結論を得ることができた。よって、拙稿で扱った『法性不動経』の前伝期蔵訳本に訳語 “*theg pa chung ngu*” がみられるというのは、それが梵語からの翻訳ではないことを示唆することになるだろう。その訳語は漢語 “小乗” を翻訳したものであるという点に関しては、他の漢文蔵訳資料が参考になる。それを網羅的に調査することはできないが、今のケースでは『大般涅槃経 (*Mahāparinirvāṇasūtra*/MPS)] 漢文重訳が傍証になるので、それを以下にみておくことにする。

大乘の『大般涅槃経』の蔵訳本は、以下の2本が西蔵大蔵経に収録されている。

Toh No.119, Ota No.787. 翻訳者：Wang-phab-zhwun/dGe ba’i blo gros/rGya mtsho’i sde.

Toh No.120, Ota No.788. 翻訳者：Jinamitra/Jñānagarbha/Devacandra.

このうち後者は梵本からの前伝期の翻訳だが、前者は、周知のように、漢訳の曇無讖訳『大般涅槃経』40巻（北本、大正No.374）と、若那跋陀羅訳『大般涅槃経後分』2巻（大正No.377）をチベット語に翻訳したものである<sup>27</sup>。この漢文蔵訳は「11世紀の翻訳」とされることが多いが、翻訳者にはっきりしないところもある<sup>28</sup>。

<sup>27</sup> Cf. 佐藤[2012]. 周知のように『デンカルマ目録』(芳村 No.248)に『大般涅槃経』漢文蔵訳 (*’Phags pa Yongs su mya ngan las ’das pa chen po*. s.12600, B.42) が記載されているが、山口[1985:32]は、この目録記載の42巻本は大蔵経所収の現存漢文蔵訳56巻本とは別のものとする。

<sup>28</sup> 漢文蔵訳の翻訳時期に関しては、古くに『甘殊爾勘同目録』II (1931, p.287, n.2) が、翻訳者の一人 “dGe ba’i blo gros” を、アティシャの共訳者である rMa dGe ba’i blo gros と同一とみなして「11世紀後半の人」とした。これをうけて、Yuyama[1981:13]は、“It seems to be generally accepted that the translation was made most probably in the latter half of the eleventh century A.D.” と、慎重な言い回しをするが、その後、山口[1985:54, n.46]；松田[1988:10]；佐藤[2013:75]は皆、11世紀の翻訳とみている。しかし、漢文蔵訳の翻訳者に関して明確でない点があるので、それを記しておく。漢文蔵訳の奥書に翻訳者は、rGya nag gi mkhan po Wang-phab-zh(w)un/Dharma’i gzhi ’dzin dGe ba’i blo gros/Lo tsā ba rGya mtsho’i sde という3名が記されている。そのうち中国人 Wang-phab-zh(w)un (cf. Pelliot[1914:130-131] “王法淳(順) or 汪法順”；山口[1985:32] “王法

大正新脩大蔵経データベースによると、その漢訳『大般涅槃経』北本に“小乗”の3用例があるが、その漢・蔵はこうである。

MPS (Ch 北本447c) : 善男子。是諸大衆復有二種。一者求小乘。二者求大乘。(Cf. 南本689c, 新国訳II143) ; (Tib D(Nya)223a3-4, P(Ju)235a5-6) : rigs kyi bu 'khor gyi dkyil 'khor la yang rnam pa gnyis te/ theg pa chung ngu tshol ba dang/ theg pa chen po tshol ba'o//<sup>29</sup>

漢語“小乗”の原梵語は“hīnayāna”であったろう。しかし上の例では、その漢語をチベット語に翻訳するとき、翻訳者はその梵語に遡って漢語“小乗”を“theg pa dman pa”と翻訳するのではなくて、漢語をそのまま“theg pa chung ngu”と翻訳したのだろう。

ほかに漢語“大小乗”の訳例もみられる。

MPS (Ch 北本505c) : 若見衆生所有色相。則知其人大小乘根。(Cf. 南本749b, 新国訳III155) ; (Tib D(Ta)35b5-6, P(Nyu)39b7-8) : gal te sems can gyi gzugs dang cha

---

潤?) は不明だが、チベット人 Lo tsā ba rGya mtsho'i sde も、はっきりしない。西藏大蔵経に、1426年にインドから来蔵した Vanaratna (Nags kyi rin chen) の作品その他を Vanaratna と共に翻訳した“rGya mtsho'i sde”の名がみられるが、その“rGya mtsho'i sde”は、西藏大蔵経に同じく翻訳者としてその名がみえるところの bSod nams rgya mthso'i sde つまり Khrimts khang lo tsā ba bSod nams rgya mtsho (1424-1482) のことである。Cf. *Dung dkar tshig mdzod*, pp.407-408. この人物が『大般涅槃経』の蔵訳者であるならば同経の重訳は15世紀に行われたことになるが、しかし下田 [1986] が指摘するように、プトゥン (1290-1364) はその『如来蔵の麗飾 (*Shin tu zab cing brtag par dka' ba De bzhin gshegs pa'i snying po gsal zhing mdzes par byed pa'i rgyan*)』(Toh No.5182) において、曇無讖訳『大般涅槃経』漢文蔵訳を引用し教証として重視するから、漢文蔵訳本は、Vanaratna の共訳者“rGya mtsho'i sde”によって15世紀に翻訳されたものではあり得ない。

もう一人のチベット人“Dharma'i gzhi 'dzin dGe ba'i blo gros”が、『甘殊爾勘同目錄』のいうように前述したアティシヤの『菩提道灯』をアティシヤと共に翻訳した rMa dGe ba'i blo gros であるならば、『大般涅槃経』の重訳は11世紀中頃から後半の翻訳となるだろう。しかし rMa dGe ba'i blo gros は諸の蔵訳奥書において“Lo tsā ba dGe slong dGe ba'i blo gros” “Zhu chen gyi lo tsā ba dGe ba'i blo gros” “Lo tsā ba rMa dGe ba'i blo gros” 等と記されており、一方の“Dharma'i gzhi 'dzin dGe ba'i blo gros”という呼称は『大般涅槃経』漢文蔵訳の奥書のみに見える特異なものである。しかも rMa dGe ba'i blo gros の訳業に関して特に注目されるのは因明論書の訳出で、彼はダルマキールティの『量評釈頌 (*Pramāṇavārttika-kārikā*)』(Toh No.4210, Ota No.5709) と『量評釈第1章自注 (*PV-svavṛtti*)』(第1~11巻. Toh No.4216, Ota No.5717(a))、デーヴェーンドラブッディの『同第2~4章難語釈 (*PV-pañjikā*)』(第12~40巻. Toh No.4217, Ota No.5717(b))、そしてシャーキャブッディの『量評釈復注 (*PV-ṭīkā*)』(Toh No.4220, Ota No.5718) という因明の極重要な諸作品をカシミールの大パンディタ Subhūtiśrīśānti と共にチベット語に翻訳し、さらにダルマキールティの『浄正理論 (*Vādanāyāna-prakaraṇa*)』(Toh No.4218, Ota No.5715) を Jñānaśrī-bhadra と共に翻訳している。羽田野 [1986b:323] は、彼 rMa dGe ba'i blo gros のことを「流伝後期におけるチベットの因明の旧学派の巨頭として重要な人物」と評する。Cf. 羽田野 [1986a:36-37]. “因明の巨頭”が漢訳『大般涅槃経』をチベット語に翻訳したのだろうか。Dharma'i gzhi 'dzin dGe ba'i blo gros が後伝期の有名な rMa dGe ba'i blo gros と同一人物であるかどうかはなお検討の余地があると思われる。

<sup>29</sup> もう1つの例をあげておく。MPS (Ch 北本455c) : 願諸衆生得無上戒大乘之戒非小乘戒。(Cf. 南本697c, 新国訳II417) ; (Tib D(Nya)244a1, P(Ju)258a4-5) : sems can thams cad bla na med pa'i tshul khrimts thob pa dang/ theg pa chung ngu'i tshul khrimts ma yin pa theg pa chen po'i tshul khrimts dang ldan par shog shig//

lugs ji snyed pa mthong ma thag tu de nyid theg pa chen po'am/ theg pa chung ngu'i  
dbang po gang yin pa rig go//

この例では、漢語“大小乗”を翻訳するとき、翻訳者はそれをそのまま“theg pa chen po'am chung ngu”又は簡略に“theg pa che chung”と翻訳せずに、その漢語を“大乘”と“小乗”に分けてそれぞれを“theg pa chen po”“theg pa chung ngu”と、几帳面に翻訳する。なお漢語“大小乗”の原梵語は“mahāyāna-hīnayāna”であったろう。

上の『大般涅槃經』漢文蔵訳の例は、『法性不動經』にみられる“theg pa chung ngu”の蔵訳語が漢語“小乗”の翻訳であったことの傍証となり得るだろう<sup>30</sup>。

## おわりに

上で検討した資料は限られたものだが、その範囲で知り得たことを整理して本稿の結びとする。

- 『翻訳名義大集』に定められている梵語“hīnayāna”の蔵訳語は“theg pa dman pa”であり、その標準的な蔵訳語は前伝期の梵語経論のチベット語訳に用いられている。現在のところ、前伝期の蔵訳本に例外は認められない。
- 蔵訳語“theg pa dman pa”は、前伝期のみならず後伝期の翻訳にも無論用いられる。
- 後伝期におけるアティシャの著作の蔵訳本には、ほかに“theg pa chung ngu”“theg pa chung ba”も用いられる。その訳語は、ナクツォ・ツルティムギェルワ等のアティシャ周辺のチベット人翻訳師が梵語蔵訳において用い始めた可能性がある。それは、一つには当時チベットにおいて「小乗」を意味するチベット語として“theg pa chung ngu”が広く用いられていたからであろう。
- 後伝期における論書の蔵訳本には、ほかに「大乘と小乗」を意味する蔵訳語として“theg pa che chung”も用いられる。それに当たる梵語は“mahāyāna-hīnayāna”と思われる。後伝期には、その梵語を翻訳するときに標準的な訳語“theg pa chen po dang (theg pa) dman pa”ではなくて、蔵外文献にみられる慣用的な略語“theg pa che chung”を用いることもあった。

<sup>30</sup> 拙稿（小林[2018:48-50]）では『法性不動經』の現存蔵訳本が漢文重訳であることの根拠として、ほかに同経蔵訳本にみられる訳語“mdo sde bcu gnyis”が漢語“十二部経”を翻訳したものであることを指摘した。その傍証も『大般涅槃經』漢文蔵訳から得られる。MPS (Ch 北本 372b) : 菩薩爾時雖不広説十二部経先已通達。(南本 611c, 新国訳 I131) ; (Tib D(Nya)20a7, P(Ju)21b2-3) : byang chub sems dpa' de'i tshes na mdo sde bcu gnyis rgyas par ma gsungs mod kyi/ thams cad sngar thugs su chud la. これと同じ訳例は『大般涅槃經』漢文蔵訳に数多くみられる。E.g. MPS 北本 385b (南本 625b, 新国訳 I192), Tib D(Nya)55b4, P(Ju)56b2-3 ; 北本 449a (南本 691a, 新国訳 II148), Tib D(Nya)226b2-3, P(Ju)239a2. 上の例では、梵語“dvādaśāṅgadharmaprayāna”の如きが“十二部経”と漢訳された後に、その漢文重訳において翻訳者はその漢語の原梵語に遡ることなく、その漢語をそのまま“mdo sde bcu gnyis”とチベット語に翻訳したのであろう。

- 『大般涅槃經』漢文蔵訳では、漢語“小乗”の蔵訳語として、その原梵語“hīnayāna”の標準的な訳語“*theg pa dman pa*”ではなくて、その漢語をそのままチベット語に翻訳した“*theg pa chung ngu*”が認められる。
- 『法性不動經』の現存蔵訳本は、後伝期ではなくて前伝期の翻訳である。よって、同経蔵訳本にみられる“*theg pa chung ngu*”“*theg pa che chung*”という訳語は、梵語からの翻訳ではないだろう。『デンカルマ目録』は同経の蔵訳を「漢文重訳」と伝えるが、その伝承の通り、それらの蔵訳語は漢語“小乗”“大小乗”をチベット語に翻訳したものである可能性は大きいだろう。

### 略号及び使用テキスト

- AA *Abhisamayālaṃkāra-kārikā*. (Skt/Tib) Obermiller ed., BB XXIII.
- AKBh Vasubandhu : *Abhidharmakośabhāṣya*. (Skt) P.Pradhan ed., Patna 1967.
- ASP *Aṣṭasāhasrikāprajñāpāramitā*. (Skt) M : R.Mitra ed., Calcutta 1888, W : U.Wogihara ed., *Abhisamayālaṃkāra'ālokā Prajñāpāramitāvyaṅkyā of Haribhadra*, Tokyo:Sankibo 1973 (1st ed.1932). (Tib) D:Toh No.12, P:Ota No.734. (JT) 梶山雄一訳『大乘仏典』2(八千頌般若経 I), 中央公論社, 1974; 梶山/丹治昭義訳『同』3(同 II), 1975.
- BMP Atiśa : *Bodhimārgadīpaṇjikā/Byang chub lam gyi sgron ma'i dka' 'grel* (菩提道灯難語積). (Tib) D:Toh No.3948, P:Ota No.5344. (JT) 望月[2015].
- GP KU Vajrapāni : *Guruparaṃparakramopadeśa/Bla ma brgyud pa'i rim pa'i man ngag* (上師相承次第優波提舍). (Tib) D:Toh No.3716, P:Ota No.4539.
- KP *Kāśyapaparivarta*. (Skt/ Tib) A. von Staël-Holstein : *The Kāśyapaparivarta, A Mahāyānasūtra of the Ratnakūṭa Class* (大宝積經迦葉品梵蔵漢六種合刊), 商務印書館, 1926. (JT) 長尾雅人/桜部建訳「迦葉品(カーシャパの章)」『大乘仏典』9(宝積部経典), 中央公論社, 1974, pp.5-124.
- MA Jñānākara : *Mantrāvātāra/gSang sngags la 'jug pa* (秘密真言入). (Tib) D:Toh No.3718, P:Ota No.4541.
- MAVi *Madhyāntavibhāga*. See MAViBh.
- MAViBh Vasubandhu : *Madhyāntavibhāgabhāṣya*. (Skt) G.M.Nagao ed., *Madhyāntavibhāga-bhāṣya*, 鈴木学術財団, 1964. (Tib) S.Yamaguchi ed.,『蔵漢対照弁中辺論附中辺分別論釈疏梵本索引』鈴木学術財団, 1961(初版1937). (JT) 長尾雅人訳「中辺分別論」『大乘仏典』15(世親論集), 中央公論社, 1976.
- MPS *Mahāparinirvānasūtra/Phags pa Yongs su mya ngan las 'das pa chen po'i mdo*. (Tib) D:Toh No.119, P:Ota No.787. (Ch) 北本:曇無讖訳『大般涅槃經』40卷(大

- 正No.374), 若那跋陀羅訳『大般涅槃經後分』2卷(大正No.377), 南本: 慧嚴等編纂『大般涅槃經』36卷(大正No.375). (JT) 新国訳: 塚本啓祥/磯田熙文校註『新国訳大蔵經・大般涅槃經(南本)』I~IV, 大蔵出版, 2008~2009.
- MSABh Vasubandhu : *Mahāyānasūtrālamkārahāṣya*. (Skt) S.Lévi ed., *Mahāyāna-Sūtrālamkāra*, Tome I, Paris (repr. Rinsen 1983). (Tib) D: Toh No.4026, P: Ota No.5527. (JT) 長尾雅人訳『『大乘莊嚴經論』和訳と註解—長尾雅人研究ノート』(1), 長尾文庫, 2007; 『同』(2), 2007; 『同』(3), 2009; 『同』(4), 2011.
- MSS Atiśa : *Mahāsūtrasamuccaya/mDo kun las btus pa chen po* (大經集). (Tib) M: K.Mochizuki, *A Study of the Mahāsūtrasamuccaya of Dīpaṃkaraśrījñāna II, Tibetan Text* (Minobusan University 2004), D: Toh 3961, P: Ota No.5358.
- MUV Prajñāmokṣa (Shes rab thar pa) : *Madhyamakopadeśavṛtti/dBu ma'i man ngag ces bya ba'i 'grel pa* (中觀優波提舍注). (Tib) D: Toh No.3931, P: Ota No.5327.
- RKU Atiśa : *Ratnakaraṇḍoghāta-nāma-madhyamakopadeśa/dBu ma'i man ngag rin po che'i za ma tog kha phyé ba zhes bya ba* (中觀優波提舍開寶篋). (Tib) M: 宮崎[2007], Toh No.3930, Ota No.5325. (JT) 宮崎[2007].
- SGD Atiśa : *Śaraṇagamanadeśanā/sKyabs su 'gro ba bstan pa* (帰依教説). (Tib) D<sup>1</sup>: Toh No.3953, D<sup>2</sup>: Toh No.4478, P<sup>1</sup>: Ota No.5350, P<sup>2</sup>: Ota No.5391, S: Sherburne [2000].
- SP *Saddharmapuṇḍarīka*. (Skt) H.Kern/B.Nanjio ed., BB X. (Tib) D: Toh No.113, P: Ota No.781. (JT) 松濤誠廉/長尾雅人/丹治昭義訳『大乘仏典』4(法華經 I), 中央公論社, 1975; 松濤/丹治/桂紹隆訳『同』5(同 II), 1976.
- TMD Jñānavajra (Ye shes rdo rje) : *Tattvamārgadarśana/De nyid mthong ba'i lam* (真性見道). (Tib) D: Toh No.3715, P: Ota No.4538.
- TSS Dharmendra (Chos kyi dbang po) : *Tattvasārasaṃgraha/De kho na nyid kyi snying po bsdus pa* (真性心髓集). (Tib) D: Toh No.3711, P: Ota No.4534.
- VK *Vimalakīrtinirdeśa*. (Skt/Tib) 『梵藏漢対照『維摩経』』大正大学総合仏教研究所梵語仏典研究会, 2004. (Skt) 『梵文維摩経—ポタラ宮所蔵写本に基づく校訂』大正大学総合仏教研究所梵語仏典研究会, 大正大学出版会, 2006. (Tib) Toh No.176, Ota No.843. (JT) 高橋/西野[2011].
- Gangs can ming mdzod Gangs can mkhas grub rim byon ming mdzod* (雪域歴代名人辞典), Kan su'u mi rigs dpe skrun khan (甘肅民族出版社), 1992.
- bsTan dkar Bu ston Rin chen grub : bsTan 'gyur gyi dkar chag Yid bzhin nor bu dbang gi rgyal po'i phreng. The Collected Works of Bu-ston*, Part 26, ed. by L.Chandra, New Delhi, 1971, pp.401-643.

- Dung dkar tshig mdzod*      *Dung dkar Blo bzang 'phrin las : Dung dkar tshig mdzod chen mo* (東噶藏学大辞典), Krung go'i bod rig pa dpe skrun khang (中国藏学出版社), 2002.
- Deb sngon*      'Gos lo tsā ba gZhon nu dpal : *Deb ther sngon po* (青史). D : *The Blue Annals*, reproduced by L.Chandra, New Delhi, 1976. C : 『青史 (*Deb ther sngon po*)』上下, Si khron mi rigs dpe skrun khang (四川民族出版社), 1985.
- Conze[1973] E.Conze : *Materials for a Dictionary of the Prajñāpāramitā Literature*, Tokyo:Suzuki Research Foundation.
- Ejima[1998] Y.Ejima (江島恵教) : *Tibetan-Sanskrit Word Index to the Saddharma-puṇḍarīkasūtra*, Tokyo:The Reiyukai.
- 舟橋(Funahashi)[1987] 舟橋一哉『俱舍論の原典解明—業品』法蔵館.
- 羽田野(Hadano)[1986a] 羽田野伯猷「チベット仏教学の問題」『チベット・インド学集成』1, 法蔵館, 1986, pp.29-46 (初出 1954).
- [1986b] 「チベット流伝前期の王室仏教備考—勅裁小品 Vyutpatti と目録『デンカルマ』をめぐって」『同』1, pp.304-336 (初出 1983).
- [1988] 「ジュニャーナ・シュリー・バドラ著『聖入楞伽經註』おぼえがき」『同』4, 1988, pp.100-121 (初出 1974).
- 原田(Harada)[2005] 原田覚「ダルマターシーラ考」『印仏研』54-1, pp.68-75.
- Hirakawa[1973] A.Hirakawa et al. (平川彰他) : *Index to the Abhidharmakośabhāṣya*, Prat 1.
- Ishikawa[1990] M.Ishikawa (石川美恵) : *A Critical Edition of the sGra sbyor bam po gnyis pa, An Old and Basic Commentary on the Mahāvvyutpatti*, The Toyo Bunko.
- [1993] 『sGra sbyor bam po gnyis pa 二卷本訳語釈一和訳と注解』東洋文庫.
- 磯田(Isoda)[1979] 磯田熙文「pāramitā-yāna と mantra-yāna」『東北大学文学部研究年報』28, pp.105-135.
- 『甘殊爾勘同目録』      『大谷大学図書館蔵 西藏大蔵經 甘殊爾勘同目録』II, 1931.
- 川越(Kawagoe)[2001] 川越英真「Nag tsho lo tsā baについて」『東北福祉大学研究紀要』25, pp.293-316.
- [2001a] 「同(2)」『同』26, pp.275-295.
- 小林(Kobayashi)[2008] 小林守「中観派からみた智慧の優劣」『日仏年報』73, pp.193-209.
- [2018] 『法性不動經』をめぐると諸問題』『苦小牧駒澤大学紀要』33, pp.33-95.
- 松田(Matsuda)[1988] 松田和信『インド省図書館所蔵中央アジア出土大乘涅槃經梵文断簡集—スタイン・ヘルンレコレクション』東洋文庫.
- 宮崎(Miyazaki)[2007] 宮崎泉「『中観優波提舍開宝篋』テキスト・訳註」『京都大



- 学文学部研究紀要』46, pp.1-126.
- 望月(Mochizuki)[1990] 望月海慧「『帰依の説示』試訳」『仏教学論集』(立正大学大学院仏教学研究會)19, pp.1-21.
- [2015] 『全訳 アティシヤ 菩提道灯論』起心書房.
- Nagao[1958] G.M.Nagao(長尾雅人): *Index to the Mahāyāna-sūtrālamkāra (Sylvain Lévi edition), Part 1 : Sanskrit-Tibetan-Chinese*, 日本學術振興會(長尾『『大乘莊嚴經論』和訳と註解』(4), 2011に再録).
- 西岡(Nishioka)[1982] 西岡祖秀「『プトゥン仏教史』目録部索引Ⅱ」『東京大学文学部文化交流研究施設研究紀要』5, pp.43-94.
- [1983] 「同Ⅲ」『同』6, pp.47-201.
- 西沢(Nishizawa)[2017] 西沢史仁「吐蕃王朝大藏經編纂事業考(1) — 『二卷本訳語積』と『訳訳名義大集』」『Acta Tibetica et Buddhica』10, pp.83-141.
- Pelliot [1914] P.Pelliot: “Notes à propos d’un catalogue du *Kanjur*,” JA 1914(Juillet-Août), pp.111-150.
- Roerich[1949] G.N.Roerich: *The Blue Annals*, Calcutta (repr. Delhi: Motilal Banarsidass, 1976).
- Sakaki[1962] R.Sakaki(榊亮三郎): *Mahāvīyūtpatti* (訳訳名義大集), 2Vols., 鈴木學術財團(初版1916).
- 佐藤(Sato)[2012] 佐藤直実「大乘『大般涅槃經』重訳チベット語訳の有用性」『日仏年報』77, pp.197-212.
- [2013] 「『大般涅槃經』における仏弟子チュンダとその供養」『日仏年報』78, pp.71-103.
- Sherburne[2000] R.Sherburne: *The Complete Works of Atīśa, Śrī Dīpaṃkara Jñāna, Jo-bo-rje, The Lamp for the Path and Commentary, together with the newly translated Twenty-five Key Texts (Tibetan and English Texts)*, New Delhi: Aditya Prakashan.
- 下田(Shimoda)[1986] 下田正弘「プトゥンの如来藏解釈—『宝性論』と『涅槃經』の立場」, 山口瑞鳳監修『チベットの仏教と社会』春秋社, pp.321-339.
- 庄司(Shōji)[2016] 庄司史生『八千頌般若經の形成史的研究』山喜房佛書林.
- 高橋／西野(Takahashi/Nishino)[2011] 高橋尚夫／西野翠訳『梵文和訳 維摩經』春秋社.
- 高崎(Takasaki)[1989] 高崎直道『宝性論』インド古典叢書, 講談社.
- 山口(Yamaguchi)[1979] 山口瑞鳳「『二卷本訳語積』研究」『成田山仏教研究所紀要』4, pp.1-24.
- [1985] 「デンカルマ824年成立説」『成田山仏教研究所紀要』9, pp.1-61.
- 芳村(Yoshimura)[1974] 芳村修基「The Denkar-ma, An oldest Catalogue of the Tibetan

Buddhist Canons」『インド大乘仏教思想研究—カマラシーラ の思想』百華苑,  
pp.99-199.

Yuyama[1981] A.Yuyama : *Sanskrit Fragments of the Mahāyāna Mahāparinirvāṇa-  
sūtra, I.Koyasan Manuscript*, Tokyo: The Reiyukai Library.